

[連載]

博士課程生活講座！ ～茂木さんに聞いてみよう～

第9回 文献の海で大漁を待つ

茂木俊伸

若手研究者から院生に送るエッセーです。ちょっと先輩の声に耳を傾けてみませんか？ 何か新しい世界が見えてくるはずです。

第9回 文献の海で大漁を待つ

茂木俊伸 (熊本大学)

このエッセイでは、日本語学・日本語教育学分野の博士課程（博士後期課程）にいる人、または博士課程に進学しようと考えている人に向けて、若手（と言い張るのは無理だと論されるようになった）大学教員が、自分の経験の中で「後輩たちの役に立ちそうなこと」について語ります。

1 はじめに

筆者はかつて、ウェブ上の情報を活用して先行研究を集める方法を解説したことがあります（茂木2013）。コロナ禍の現在、研究室や研究会などでのちょっとした情報交換の機会がなくなったり、そもそも大学の施設に入りにくかったりと、研究を進めるうえでオンラインの情報への依存度が高くなっている方もいらっしゃるのではないかと思います。

そこで今回は臨時特集として、オンラインで徹底的に文献情報を集めるためのノウハウを共有したいと思います。（今期、大学院生向け研究ガイドブックの最新かつ決定版である石黒（2021）が出版されてネタ切れになってしまったというわけではありませんからね！）

2 ちょっと昔話

日本語学や日本語教育学の論文の主要な発表媒体には、まず、本誌のような学会・研究会誌、あるいは書籍（論文集）といった市販ルートに乗るものがあります。この他に重要なのが、各大学の学部や研究室、学内学会な

どが発行する「紀要」です。紀要はかつて、交換文化の下に流通していました。すなわち、発行元が研究成果物として毎年お互いに送りあい、大学の資料室や図書館に収められることで閲覧できるようになるものでした。

現在よく使われる論文データベース「CiNii」（現「CiNii Research」）が公開されたのが2005年、紀要論文の本文の電子化が進みオンラインで読める率が高くなったのは2000年代後半です。それまでは、大学のこれらの場所に実際に出向いて論文の掲載誌を手にとるとというのが、最新の論文の情報を得るための方法だったのです。

3 文献収集の手間

日本語学や日本語教育学を含む人文科学分野では、自然科学分野のように最新の論文が電子ジャーナル化しているわけではないので、文献の検索から入手までの一連の過程がオンラインでは完結せず、紙媒体と電子媒体の両方の情報を扱う必要があります。

すなわち、オンラインで新しい文献の情報を見つけたら、まず電子版の本文が手に入るものは入手して、次に紙媒体しかないものは入手方法を調べて手に入れる、といった流れになっています。デジタル・ネイティブ世代にとっては、紙媒体に目配りしなければならない分、一段階手間が多いと感じられるかもしれません。

電子版の論文がほとんどなかった院生時代、図書館で紀要論文を発掘して、先生方に「こんな論文が出てましたよ」と教えてあげたら、「時間がなくてなかなか細かいところまではフォローしきれなくてねー」と感謝されたことがしばしばありました。教員になった今、これはとても実感します。振り返ってみると、自分の研究テーマに直接関係する論文だけでなく、周辺領域やその他の分野まで、純粋な興味に基づいて最新の研究成果を追いかけるのは、時間と意欲と体力がある大学院生の特権だなあ、と思います。

しかし、その分野の専門家を名乗る以上、ある程度は研究動向を把握し続けなければなりません。効率のよい文献情報の入手は、どれだけ自動化の仕掛けが作れるかがポイントになってきます。

4 「待つ」情報収集

自分が所属している学会や研究会、研究室等が発行している雑誌は、現物が手に入ります。しかし、実際に手で触れることができない、おそらく大多数の文献については、まずはそれらが出版されたという情報を手に入れる必要があります。

そのために、研究室や図書館、あるいは大きな書店に定期的に立ち寄るといった「巡回」を心がけてきた方もいるでしょう。しかし、コロナ禍でなかなか外に行けない、あるいはだんだんそのための時間がなくなってきた、といった場合、どうしたらよいでしょうか。自分から探しに行く時間が確保できないとしたら、情報が勝手に入ってくるようにすればよいのです。茂木(2013)でもごく簡単に触れたのですが、より具体的な方法を示します。

① 通知サービスを使う

新刊書に関しては、まず、気になる出版社のメールマガジンに登録したり、Twitterのアカウントをフォローしたりして最新情報を受け取る、という方法があります。より広い情報が必要であれば、著者名やキーワードに登録したら該当する新刊が出た場合に知らせてくれる、ウェブ書店の通知サービスを利用するという方法があります。筆者の場合、honto (<https://honto.jp/>) の「著者新刊お知らせ」と「キーワード新刊お知らせ」を使っています（以下、URLやサービス内容等は2022年3月現在のものです）。

論文に関しては、Google Scholar (<https://scholargoogle.co.jp/>) の「アラート」機能を使うと便利です。Google Scholarは、電子化された論文を検索したり、自分のプロフィールや論文を登録して被引用関係を確認したりできるデータベースですが、「アラート」という、指定したキーワードを含む文献の新着情報をメール配信してくれるサービスがあります。Gmailを使っている人はすぐに登録できますし、それ以外のメールアドレスを使うこともできます。

例えば「外来語」を登録したら医学分野の症例研究の情報が送られてくる（おそらく「外来」診療の報告だから）といった機械処理ならではの問題もあるのですが、1回に送られてくる文献数はそれほど多くないので、慣れ



図1 Google Scholarの「アラート」機能

れば問題ないと思います。(ちょっとがっかりしますけどね。)

② RSSリーダーを使う

一時期ほど利用されなくなりましたが、ニュースやブログが更新された際に通知を受け取る「RSS」という仕組みがあります。

国立国会図書館に納められた雑誌の目次情報(学会誌や紀要であれば論文タイトルや著者等の情報)はRSSの形で週1回配信されているので、これを受け取れるようにしておくくと便利です。先に述べたように、私たちの研究領域にとって紀要論文は無視できない存在なのですが、冊子体の交換文化はさまざまな事情で電子化の進展とともに衰退しつつあり、最新情報の入手経路を変えざるをえない状況になりつつあります。

ちょっと面倒ではありますが、国立国会図書館の「雑誌記事索引採録誌一覧」(https://www.ndl.go.jp/jp/data/sakuin/sakuin_index.html)で必要な雑誌を探してRSSリーダーに登録しておくことで、目次情報をまとめて受け取ることができます。(余談ですが、この五十音順の一覧を見ると、世の中にはこんなにたくさんの紀要があるのか、と驚くと思います。)

情報を受け取るためのRSSリーダーは、例えばパソコンの場合、メールソフトのThunderbirdで「フィードアカウント」を作成するといった方法もありますが、ブラウザ上で動作するサービスを使うのが便利です。筆者は「Inoreader」(<https://www.inoreader.com/>)というRSSリーダーに、勤め先の研究室が交換を停止して読めなくなった紀要を中心に登録しています(無料プラ



図2 Inoreaderで読む紀要の目次情報

ンでは150件までのタイトルが登録できます)。必要な論文に「あとで読む」マークを付けておけば、それがそのまま気になる論文のリストになります。

5 おわりに

今回紹介した方法は、「多くの情報をとりあえず受け取り、必要な情報だけを抜き出す」というものです。情報の取捨選択が前提であり、効率としてはあまりよくないかもしれません。しかし、個人的には、捨てることはいつでもできるので、入ってくる情報は不足しているよりも多い方がよいと考えます。

もちろん、よりよいのは、情報収集のチャンネルを複数持つことです。一人で文献を集めるだけでなく、研究室や学会のような研究者コミュニティの中で「この論文、読んだ?」、「君の論文が引用されてたよ」と積極的に情報交換しあえることが理想でしょう。オンラインだけでなく対面でもそのような機会が再び十分に得られるようになることを祈っています。

参考文献

- 石黒圭 (2021)『文系研究者になる―「研究する人生」を歩むためのガイドブック』研究社
茂木俊伸 (2013)「ウェブを活用した日本語研究文献情報の収集」『日本語学』32(14), pp18–30. 明治書院